

あるがまま老いたし五月の風を聴く 与史

人は内憂外患の様々な要因の組み合わせの中に翻弄されつつ、毎日を切り抜けている。純粹に自らの心のみに関掛り、あるがままに老いたいの共通的願い。「五月」は、五月雨の季語がある一方、緑風の季語もあるように、爽涼感に溢れた時期でもある。「風を聴く」のフレーズは、この「五月」と結び付けられることによって、その威力を更に高めている。

チアリーダーのバトン投げ上げ五月晴 貞勝

雨天が続いた後、恩寵のように晴れ上がった青空に、チアリーダーの投げ上げたバトンが吸い込まれて行く。バトンはいずれチアリーダーの手元に戻るのであるが、青空を昇降する幾ばくかの自由な時間を与えられる。その間、観衆の心はバトンとともに青空に向かい、澄みわたる空を浮遊し開放される。五月晴の下に展開されるイベントの華やきも感じ取れる。

身ほとりの片付け済まず夏落葉 秀一

日常の机辺の整理であろうか、あるいは、これまでの人生にまつわる種々の事柄の整理であろうか。後者であるとすれば、下五の「夏落葉」の配合がよく効いている。「片付けて……落ちる」という意味の連関性は感じられず、作者の只今の心の置き場を垣間見ることができぬ。

菖蒲湯や邪鬼は四天の足の下 幸枝

眼前には、四天王が邪鬼を踏み押さえている彫像。作者の脳裏には、無邪気に戯れる子どもとともにした菖蒲湯。二句一章、二物衝撃の作句法の妙味が遺憾なく発揮されている。

代掻きにはずむ子の声泥の顔 幸

代掻きや田植えの単なる報告の句になり勝ちな句材の集合であるが、この句材の料理の仕方が上手い。「子の声」「顔の泥」と畳み掛けるように言い切ったところが手柄である。「子の声子の顔」という在り来たりのリフレインではなく、子の顔にある「泥」に着目し、これに特定したことによって、この句の成功は決定付けられた。

金時のような嬰の足菖蒲の湯

貞勝

掌中の玉のように抱いている赤子のふっくらとした足は、金時の足のようである言う。あらためて言われてみれば、確かに金時さんの足そのものである。嬰の健やかな成長を心から願う作者の姿を彷彿とさせる、金時と菖蒲湯の配合が巧みである。

海上の富士も一品夏料理

幸

海原の彼方、雲海に囲まれて浮かぶ夏富士のたたずまいは、一幅の日本画であり、それを眺めながら召し上がられた夏料理は、さぞや美味しかったと思われる。海上の富士を料理の一品として捉えたのは、素晴らしい着眼。遠方の名所旧跡を訪ねなくとも、句材は日常の生活の中に転がっている、ということを実証する佳句である。

若葉の香纏ひて阿修羅に対面す

溪水

千年余の世の興亡と人の盛衰をせずに視て来た阿修羅像。眼前の阿修羅は何も言葉を発しないけれども、作者の胸裏にはそれまでに見聞してきた種々の出来事が走馬燈のように流れていく。作者の身ほとりには、生命感あふれる若葉の発する香りが、馥郁と満ち溢れている。

光あり蔭あり若葉のまわり道

文枝

まだらに点在する木洩れ日を、単刀直入に「光あり蔭あり」と切り出したところに力がある。自然現象としての「光」と「蔭」と鑑賞する外に、生きて行く間には光るときもあれば蔭るときもある、と鑑賞することもできる。その場合には、下五の「まわり道」がよく効いている。でも、掲句は、客観写生の句として素直に感じ取れば良いのかも知れない。

初夏やトンネルつなぐ海景色

秀一

山が海に迫った海岸線を列車や車で旅するとき、トンネルと海景色が交互に現れる。この光景を何とか俳句に収めようとする事は度々あるが、「トンネル出づれば・・・」とかの陳腐な言い回しに終ることが多い。トンネルまたは海景色を主語として、「トンネルつなぐ海景色」という表現は上手い。

レントゲン胸の翳りや梅雨兆す

与史

最近撮影した胸のレントゲン写真に翳りがあるという。専門の胸部外科医が鑑別しなければ見落としてしまうような小さな影である。しかし、その事実を示された者には、少なからずの動揺が走る。この心理的な動揺と「梅雨兆す」との配合が効いている。「梅雨兆す」に作者の不安感がしずかに投影されている。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守